

幼妻こずえちゃんと
見つめ合いながら

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

自宅で濃厚
イチヤラブ
こずえっちゃん♡

「きゅーさー……おかえりー……」

仕事を終えて我が家の扉を開けると、
可愛い奥さんが笑顔でお出迎えしてくれた

かき

こずえは家だと着るのがめんどくさいのか
着る意味がないと思っっているのか
裸のままのことが多いが、

裸エプロンは一度頼んでみたら
「こーゆーのが……すきなのー……？」と
言っって喜んで着てくれるようになった

「きょうもおつかれー……♡
ごはんにするー……？
おふろーにするー……？
それとも……こずえー……？♡」

「えへー……うずえ……
じゅんびして……
ずっとまっていたよお……♡」

定番の台詞の最中、
こずえの股からは既に水滴が垂れていた
こずえの期待の眼差しが
こちらの股間を熱くさせる……

水たまり

「ふふふーん……
はやくー……しよー……♡」

こずえが玄関先にも関わらず
抱きついてきた

♡♡♡♡♡

一緒に住み始めてからか
こずえはかなり積極的になり、
近所に見られる危険があらうが
どこでも好意を寄せてくるようになった

フー♡

むっ♡

フー♡

「はーやーくー……♡」

ふっ♡

膨らみかけの小さな胸と
湿った股間を押し付けてくる

「んっ♡♡」

ゆっさゆっさと小さな身体を揺らし、
濃厚な女兒の香りを漂わせながら
こずえは顔を近づけてきた

「んっ……れる……♡
あっ……んあっ……じゅるっ……♡」

そのままこずえに口を塞がれ
こずえは舌を絡めてきた

いっ……♡

れっ……♡

初めての時からこずえはキスが好きで
自分からよくしてきたが
最近ではむさぼるような
下品なベロチューも積極的に
するようになってきた

「んっ……じゅる……ふわあ……♡」

完全にスイッチが入ったこずえは
激しく舌を動かし、自分のよだれを流し込み、
こちらのものの音を立てながら舐めとってきた

じゅるっ……♡

「えへー……♡
きょうも……
おかえりのちゅー……
きもちいいねー……♡」

俺の小さな奥さんはどんどん
えっちに成長していった

濃厚なベロチューをした後、
こずえは少し落ち着いてくれたのか
ようやく離れてくれた

『きょうは……
とくせいかれーだよ……』

『いっぱいたべよーね……』

こずえは単純にコスプレ感覚で
エプロンをしているのではなく
ちゃんと奥さんとして夕食を作ってくれている
今日はカレーのようだ

仕事の疲れと、先ほどの濃厚なキスによって
俺の股間ははちきれそうになっていた

この無防備に愛液とメスの匂いをまき散らす
少女の後ろ姿に我慢しろというのは酷だが、
こずえとの愛の時間のためにここは我慢だ……

沸き立つ劣情と興奮を抑えながら
家の中に入り、玄関のカギを
しっかりと閉めた

「……」

「ぶろでゅーさーは…
そこでまっけてー…」

着替えを終え、リビングに戻ると
こずえは台所で夕食の準備をしていた
待ちきれないのか、股間からずっと
愛液が垂れ続けていた…

もしかしたら一人でオナニーでも
やっていたのか、
こずえの股から流れる液体は
既にどろりと粘り気を帯びていた

びしょびしょの女性器を見せつけられる
こずえは小さいので台所に立つときは
椅子の上に立つのだが、
ちようどおまんこが目の高さに来てしまい
目のやり場に困る

ふにふにしてて
とても美味しそうだ



興奮すればするほど粘度が高くなるものなのか？
びっちり閉じたこずえの女児まんこから
本気汁のような愛汁が出続けている

こずえ自信は淡々と
夕食の準備を進めていた…

「きょうは…はたもたてるよー…♪」

「ぶろでゅーさーのは…
とくべつだよー…♥」

カチャ
カチャ

余程俺が帰ってきたことが嬉しいのか
この後夫婦の営みを期待しているのか、
ご機嫌なこずえの声は甘ったるくなっており
まるで好きな歌を歌っているかのようにだった

ドロ〜っ

ぽろぽろ
ぽろぽろ

「ふわぁー……たべよ……」

くまさんスプーンを片手に
特製のカレーをこずえが運んできた

熱気のせいもあり、エプロンは身体に張り付き
こずえの幼い身体のラインが浮き出ている

肩紐もずれ落ちており、
既にビンビンとなった乳首が目に入る

「もう、めーっだよ？
ちゃんとごはんたべよ……」

こずえは自分の身体が魅力的で
挑発的なことに気づいていないようだ
あとでその身体にしっかりと
教えてあげなくては……

「ふわぁ……こずえのおっぱいのほうが
おいしそう……」

幼いながらも、むちっとした身体……

「ロォ……」

「むわぁ……」



夕食の後…
こずえは俺に寄りかかってきて
身体を寄せてきた

すく〜ん♡

『えへー…ぷろでゅーさー…♡』

すり♡
すり♡

ぐい

ぐい♡
ぐい♡

勃起していることをわかったうえで
お尻を押し付けてきており、
その妖精の瞳は
完全に獲物を見るような
挑発した目をしていた

『あー…びくって…なったねー…♡』

俺の反応が嬉しいのか
こずえはお尻をさらに押し付けてくる

手で股間近くをすりすりとさすり
より勃起を促し、
もう片方の手ではエプロンをめくり
勃起した乳首を見せつけてきた

ぐい♡
ぐい♡

『えへー…おいでー…きょうも…
こずえがおくちで…ぺろぺろ…
してあげるよー…♡』

「ふわぁ…♡
ぷるでゅーさーのずぼん…
ぱんぱんになってる…♡」

こずえが膝をつき
膨らんだ股間の前に座った

子どもをあやすママのような
甘々な口調で語りかけ、
その手はやさしく股間を撫で始めた

いきなり激しくさすったりせず
ゆっくりゆっくりと
やさしく撫でまわす…

すり
すり

ちゅ…

ちゅ…
ちゅ…

なで
なで

「なでなで…なでなで…♡
それじゃあ…ぬきぬき…
しよっか…♡」

こずえがズボンのチャックに
手をかけた

「きょうも…こずえとえっちなこと…
したいの…♡
えへ…こずえもだよ…♡
いっぱいしようね…♡」

「びゅん…びゅん…
きのうもいっぱいしたの…
おちんちんき…だね…♡」



『ふわぁ…♡』

勢いよくちんぽが飛び出し
こずえのほっぺたに当たる

マッシュマロのようにやわらかい
こずえのほっぺたはほんのり温かく
包み込まれるようだ

妻とはいえ、まだ〇二歳のアイドルに
チーズのようにドロドロした
鼻を突くようなチンカスマミれの
くっさいちんぽの匂いを嗅がせている

その光景だけで精子がぐっぐぐつ作られ
ちんぽがピンピンになる

すっ…♡

ずわ…♡

せい…♡

『でも…おしそり…♡』

『すっ…ふわぁ…♡』
すっく…ふわぁ…♡

こずえがちんぽを握って
匂いを嗅いだ

こずえは嫌がるどころか
うっとりとしんカスの匂いを嗅ぎ続けている
すっかりちんぽが大好きな子になってしまった

こずえはチンカスや匂いを
気にも留めず、ちんぽを舐め始めた

上下左右に巧みに舌を動かして
丁寧に丁寧にちんぽとチンカスを舐めまわす

こずえの小さな舌はとても熱く
我慢汁がドクドクと流れ始めた

『きょうも…おつかれさまー…
いっぱい…きもちよくなろうねー…♡』
苦労かのようにやさしい言葉かけながら
懸命にちんぽのご奉仕をし、
射精を促してくる

ちんぽを舐める度に
こずえの甘い吐息がちんぽに当たり
刺激が増えていく

毎日啜えられているとはいえ
気持ちよすぎて
今にも射精しそうだ



「えへー…ぶるでめーさー…
これ…すきー…♡」

こずえはこちらを見つめ、
目が合うと
自分の舌を尿道に突っ込んできた

こずえの舌がくねくね動き、
容赦なく尿道に入ろうと責め立ててくる
射精間近だったこともあり、
尿道口はぱっくりと口を開け
こずえの舌の進行を許していた

「ふわぁ…おしるすこいー…♡
どくどくでてる…♡
もっとお…♡」

「きもちー♡…♡
○○おしえてもらったの…♡
おとこのひとは…♡…♡ういのが…
すきなんだって…♡」

今まで感じたことがないような
強烈な刺激が走り
ちんぽがビクビクと痙攣を起こす

腰がガクガクと浮き始めた
サキュバスのような幼妻に
何の抵抗もできず、ちんぽの奥からドクドクと
精液が登り始めたのを感じた

「えへー…だしちゃえー…♡」

どびゅつと音が聞こえてきそうな程
勢いよく射精した

[illegible]

射精してもこずえのご奉仕は止むことはなく、手コキで更に射精を促してくる

「♡……♡」

こずえはずっとこちらを見つめてくるが
その手は止まることなくちんぽを
しごいている

『えへへー…いっぱいでてるねー…
こんどはー…おふとんで…ねっ♡
ぷろでゅーさー…♡』

6-5T₁-5T₂T₃

激しい射精をしたばかりだが休む暇などではなく愛すべき妻からベッドへのお誘いが行われた。射精後の敏感な状態のままだが妻を抱きかかえて寝室へと向かった！

寝室に着くと汚れたエプロンは脱ぎ、
こずえはくまのぬいぐるみを抱きかかえ
セックスの準備を始め出した

「あっ……んっ……ふわぁ……♡」

何回も身体を重ねたが、やはり年相応に
まだ怖いのか不安なのか、それとも
ただ単にぬいぐるみを抱くことが大好きだからか
これがこずえのルーチンとなっている

じゅぶじゅぶと音を立て、
メスの匂いをまき散らし、
吐息も荒くなってきた

くちゅー、くちゅー

んんん……

うん、うん

うん、うん

ぬん、ぬん……

「えへー……おまんこ……
じゅんび……できたー……♡」

ぬいぐるみを抱いて
激しくまんこをいじるとい
相反するその姿がすごく興奮した
そのままこずえを押し倒し、
ちんぽを挿入した

しっかりと指で自らのまんこを
ほぐし、子作りの準備を進める

こずえは身体の関係を持つてからは
自宅で一緒にいるとすぐに発情するようになり
帰宅した時から愛汁を垂れ流していたので
今さら膣をいじる必要はないだろうが
こずえは何事も全てこなす子なんだろう

「あっ…んっ…ふわあ…あっ♡
あんっ…っ♡♡」

遠慮を知らないこずえの声が
寝室に響き渡る
相変わらず天使のようなふわふわの
甘い喘ぎ声がちんぽに響く

こずえの膣内はマッシュマロのようにやわらかく
ほぐれているが、入口も奥もしっかりと
締め付けてきて、

それに答えるようにこちらにも
必死に腰を動かし、
こずえにちんぽを打ち付けた

念入りに準備して熟成させた
こずえの子どもまんこは
元々の体温の高さも相まって
ちんぽが火傷しそうなほど熱い

愛の巣でギシギシとベッドを揺らし、
幼い妻のまんこを責め立てる

まだ成長しきっていないが、
その小さな身体はとても美しく
男を必要以上に興奮させ、

ちんぽが出し入れされる度に
子宮で押されたお腹が膨らみ、
圧倒的な体格差を実感させてくる

「あっ…んっ…あっ…
…あんっ♡」

えっちに積極的になったこずえだが
後ろからは未だに少し苦手らしく
逃げるかのように
くまさんを思いっきり抱きしめて
頑張って声を我慢していた

「ぶろでゅーさーのかお…
みれないの…やー…」と
言っではいたが、頼むと後ろを
向いて肉穴を使わせてくれた

そのやさしさに答えるように
こずえのお尻を驚掴みにし、
思いつきりんぽをぶち込んだ

手に収まる程度の大きさしかないが
しっかりと女性の身体のように
やわらかく、指が沈んでいく

パンッパンッと激しく
肉と肉がリズムよく
ぶつかる音が響き、
射精が近づいていく

濃厚な精液がちんぽを昇っていく

こずえに「中を出していい？」と
聞くと「…うん♡」と小さい声で
答えてくれた

幼い少女にドロドロの精液を
吐き出した

小さなその身体は受け入れられる
精液の量も少なく、すぐに溢れかえってきた

「はあ…はあ…♡
んっ…ふわぁ…♡」

こずえはとろーんとした表情で
肩で息をしながらも
浅く絶頂を迎えている

「でてる…きもちいい♡」

中に出されているのを感じているのか、
こずえの膣内はちんぽを締め付け、
びくんびくんと痙攣し、
必死に精液を飲み続ける

「もっと…おちんぽ…
おしる…だせ…♡♡」

射精中にもかかわらず、
更に精液を要求するこずえ
妻の性欲を満たすため、
再びちんぽを硬くする



「おっ……あっ……ああっ♡
……おおお……おっ♡♡」

一度中出しをしようと、こずえは性欲が止まらなくなり、ちんぽに自らのまんこを突き挿し、激しく腰を降り始める

天使の下品な喘ぎ声が大きく響きわたる

「おくう……ちんぽ……はいってる……
ふわあ……♡」

普段の妖精の姿からはかけ離れた
精液をむさぼるためだけの
容赦ないえぐいピストン運動

完全にちんぽを根元まで啜え込み
こずえが上下する度に
ポコポコとお腹が浮き出てくる

普段のレッスンで鍛えた
身体を十二分に活用し
射精を促そうと懸命に腰を動かす

「おお……おおお……あっ♡」

こずえはオホ声を出しながら
何回も絶頂を迎え、
膣内を締め上げるが
こちらが射精するまでは
絶対に腰を動かすことを止めない



「ぶろでゅーさー…ちゅー…♡♡」

こずえが騎乗位のまま抱きついてきて
舌を入れてきた

舌を絡めてきても下の口の方は
休まることはなく
ひたすら幼い肉壺を締め付ける

こずえの小さな子どもまんこを
使った激しい行為に我慢できるわけもなく
ビクビクと亀頭が膨らみ射精が始まる

「んっ…あっ…んっっ♡」

濃厚なディープキス
こちらのよだれを取ろうと
小さな舌が必死に絡めてくる

「もう…でる…♡♡
いいよ…こずえのなかに…
いっ…ばい…だせ…♡♡♡」

こずえがラストスパートをかけ
ちんぽに思いっきり子宮口を押し当て
啜え込んできた



心ク

ヒック

ビク

出る出る出るっ……
 気持ちいい……脳がとろける
 射精はまだ止まらない……

「えへー…ぽかぽか…だねー…♡
あかちゃん…できたかなあ…？♡
ねえ…ぷろでゅーさー…♡♡」

そう言っでこずえはとろけ顔で
微笑んだ

はま…♡

「ふわぁ…まだ…
おちんぽかたいね…？♡
じゃあ…まだあ…こづくりする…？♡」

びく♡

はま…♡

つぽオ…♡

はま…♡

長い長い射精が終わり、
こずえのお腹は精液に押し出され膨れていた

入りきれなかった精液があふれ出て
互いの体液は混ざりに混ざり合い
二人の寝室はその行為の匂いが
溢れかえっていた

こずえは密着したまま…
ずっと見つめ合いながら…
再び腰を動かし始めた…

愛する幼妻との夜の営みは
まだまだ続く……

数時間後…

「ちゅー…ぷはあ…♡

こずえ…ぷろでゅーさーのあじ…
すきー…♡」

あの後何回も搾り取られ
最後は口の方でも
精液を要望された

こずえの幼いながらの体力と性欲に
年の差を感じさせられる

「えへー…だいじょーぶだよー…？」

こずえは…ずっと…
ぷろでゅーさーのおよめさんだよー…♡」

こずえはそう言っでやさしく
手を握ってくれた
不釣り合いな関係を気にしてることが
顔に出てしまってたようだ

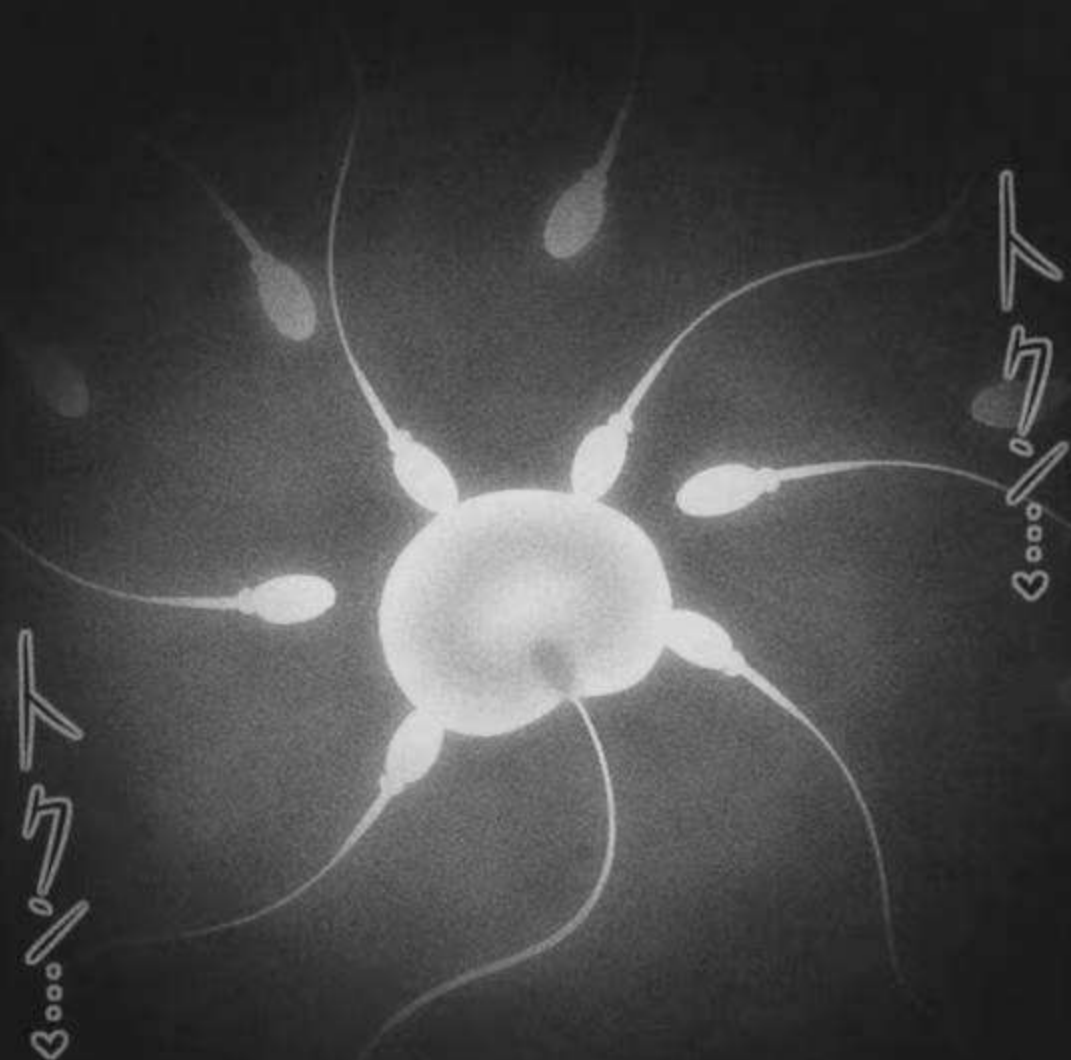
こずえは○一歳の小さな子とは思えないような
温かく心地の良い包容力でいつも癒してくれる

「こずえ…ねむたくなってきたあ…
おやすみー…ぷろでゅーさあ…
だいすき…だよー…♡」

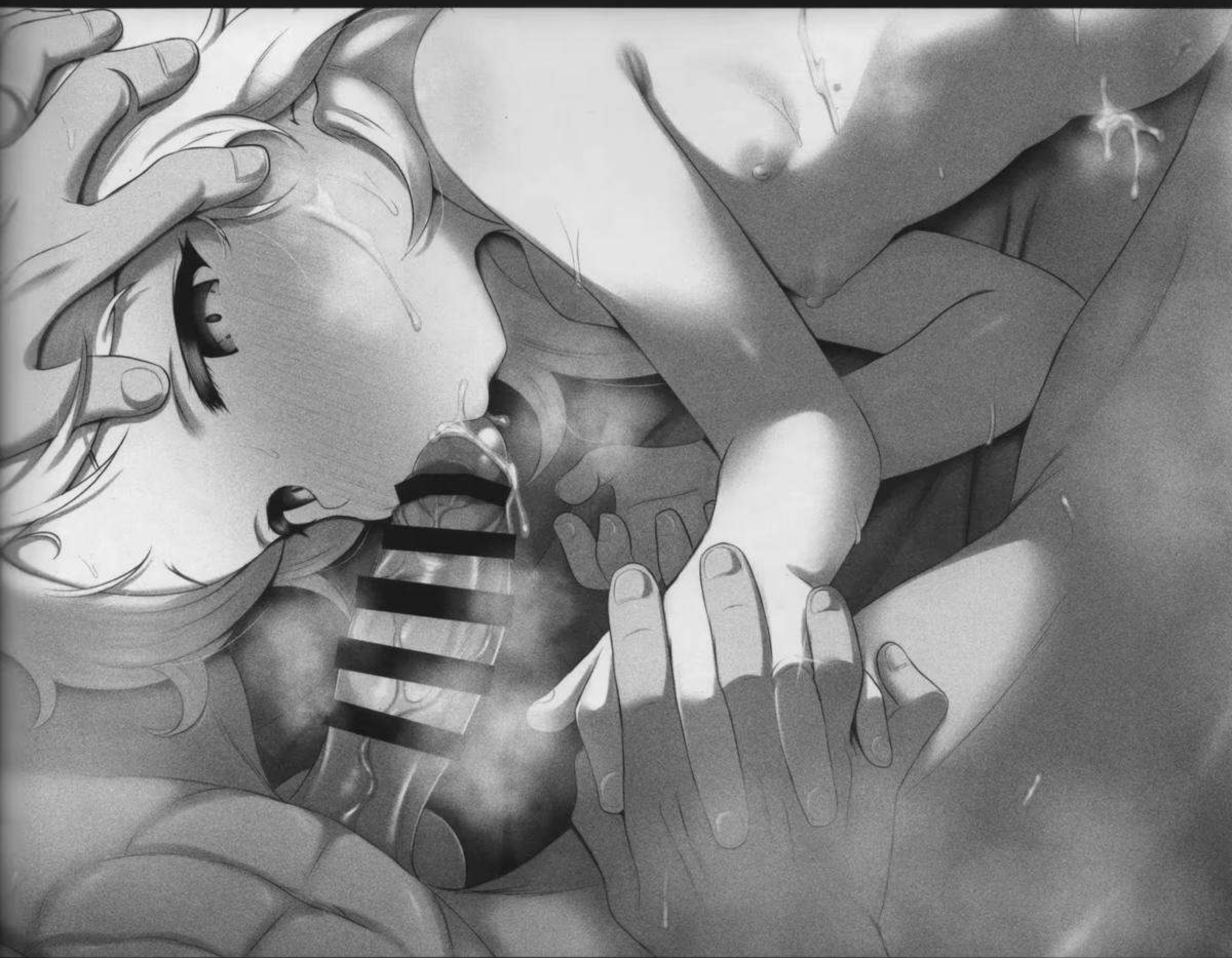
小さな妖精の子は眠りについた

うちの幼妻こずえは
えっちで可愛い…

3000/3000



3000/3000



あとがき

こずえは担当であり、娘であり、恋人であり、嫁であり、妻…。
一生好き。

奥付

誌名：幼妻こずえちゃんが見つめ合いながら自宅で濃厚イチャラブこずえっち♡

P.N：星空ミコト

印刷所：株式会社サングループ様

発行日：2024/12/29 コミックマーケット105

pixiv：458455

X (twitter)：hosizora_mikoto

無断転載/未成年者の購読/WEBへのアップロードを禁じます。

「ぷろでゅーさー…おかえりー…♪」

「きょうもおつかれー…♡
ごはんにするー…？おふろーにするー…？
それとも…こずえー…？♡」

「もう、めーっだよ？
ちゃんとごはんたべよー…？」

「きょうも…こずえとえっちなこと…
したいのー…？♡
えへー…こずえもだよー…♡
いっぱいしようねー…♡」

「ほらー…もっとだそうー…♡
しーしー…♡しーしー…♡」

「えへー…ぽかぽか…だねー…♡
あかちゃん…できたかなあ…？♡
ねえ…ぷろでゅーさー…♡♡」

「えへー…だしちゃえー…♡」

「すうー…ふわあ…
すくく…くさいねー…♡」

「えへー…だいじょーぶだよー…？」

「こずえは…ずっと…
ぷろでゅーさーのおよめさんだよー…♡」